

報告番号	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: 40px; height: 20px; display: inline-block; text-align: center; margin-bottom: 5px;">甲 保</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">第 44 号</div> 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	久保 幸子
題 目	Differences in Male Climacteric Symptoms and Lifestyle Depending on the Duration of Working among Rotating Night Shift Workers (交代制勤務年数における男性更年期症状とその背景としての生活習慣)
<p>背景：交代制勤務は、現代社会において欠かせない就業形態であるが、これまで健康維持が困難であることや、交代制勤務と短期的・中長期的な健康障害が報告されている。しかし、交代制勤務者の勤務年数及び生活習慣と男性更年期症状との関係についての検討は見当たらない。</p> <p>目的：本研究の目的は、交代制勤務年数によって男性更年期症状に差がみられるのか、その背景として交代制勤務年数による生活習慣に違いがあるのかを検討することである。</p> <p>方法：本邦の製造業に従事する深夜勤務を含む男性交代制勤務者1891人を対象に自記式質問紙調査を実施した。勤務年数は10年未満、10-19年、20-29年、30-39年、40年以上の5群に分類した。生活習慣は、朝食摂取の有無、主食・主菜・副菜の揃った食事の回数、各勤務帯の睡眠時間、運動習慣の有無、飲酒の頻度、喫煙率等について調査した。また、男性更年期症状は、世界で広く使われているAging Males' Symptoms (AMS) scaleを用いた。分析方法は、それぞれの生活習慣と交代制勤務年数との関係は、χ^2乗検定を行い、下位検定として、残差分析を実施して、各勤務年数間の比率の差を検定した。AMSスコアは、Kruskal-Wallis testで比較した。本研究は、徳島大学病院臨床研究倫理委員会で承認を得た研究計画をもとに実施した (承認番号2745)。</p> <p>結果：分析対象は40歳以上の812人のうち、AMS17項目全回答者636人であった。交代制勤務年数が10年未満群は97人、10-19年群は88人、20-29年群は212人、30-39年群は142人、40年以上の群は97人であった。AMA総スコアは、交代制勤務年数が10年未満群と10-19年群との間に有意差が認められた ($p=0.033$)。AMSの身体的スコアは勤務年数による有意差を認めなかった。AMSの精神的スコアは勤務年数による有意差を認め、40年以上勤務している交代制勤務者のスコアは、10-19年群の勤務継続者に比べて有意に低かった ($p=0.011$)。また、AMSの性機能スコアも勤務年数による有意差を認めた。対象者の生活習慣に関して、交代制勤務歴40年以上の勤務者は、10年未満、10-19年、20-29年、30-39年と比較して日勤帯の主食・主菜・副食の揃った食事の頻度が有意に高かった。また、交代制勤務年数が30-39年と40年以上の群は、それ以外の群と比較して、毎日飲酒する者の割合が有意に少なかった。それ以外の生活習慣については交代制勤務年数間に有意差は無かった。</p> <p>考察：交代制勤務歴が長くなるにつれて、男性更年期症状の程度は強くなると推測したが、20年以上の群において有意差はみられず、40年以上の長期交代制勤務者では、精神症状のスコアが10-19年群よりも有意に低いことが明らかとなった。長期交代制勤務者は、日勤帯の食事バランスに配慮していること、夜勤に差し支えないように飲酒を控えている可能性が考えられた。</p> <p>結論：20年以上の交代制勤務継続者のAMS総スコアは、有意差を認めなかった。その一因は、食生活への配慮と飲酒を控えることであると考えられる</p>	